



わが国の自動車産業と共に順調な成長 ～自動車に求められたダイカスト金型～

株式会社松岡鐵工所 会長 松岡 昭氏

毎日職場を回る日課

毎日の日課が午前中は工場内を回りながら、職場のみんなに“おはよう”と声を掛けることだという。14年前に長男である今の社長に交替してからも“じっとしてられない”性格から習慣付けている。多分、社内を回るとは、職場の雰囲気も分るし、84歳の健康を維持する役割も兼ねていることにもなる。

長兄が鉄工所を設立

松岡会長は、昭和23年（1948年）に日本大学の経済学部を出るとすぐに家業を手伝うことになった。「松岡鐵工所」の設立は、長兄の友人が鉄工所で成功したのに感化されて、父親に資金を出してもらい、居抜きで工場を入手して長兄一人で始めた。しかし過酷な仕事から結核を患って終戦後昭和21年に25歳の若さで亡くなった。

そのため、父親は米穀・肥料・飼料の商人であったが、形だけの社長を引き受け、長女の夫が、軍隊では技術将校であったことから副社長として長兄の仕事を引き継ぐようになった。

仕事は魚雷に使う鋏の製造をしていたが、戦後はフライパン、ハンドスコップ（写真）、ローソク立て等アメリカのB29が焼夷弾を落とした時にその爆弾に使われた六角形状の平板を拾ってきて日用品の製造でしのいできた。これらの加工は自家



製の簡単なプレスマシンを使った。それで物ができればいろんな注文が舞い込んできた。

仕事らしいものが来たのは、今は樹脂の射出成形機の大手である名機製作所が、終戦当時、油圧機器メーカーであったのが、ダイカストマシンにも乗り出そうとしていた。ユーザーからアルミのスプーン製造を依頼されたときに、その金型をやってくれと言われ金型を初めて作るようになった。

その後、名古屋はパチンコの機械では有名な地域で、アルミ製のパチンコ玉受け皿の注文がきた。その話が伝わり、名古屋だけでなく大阪や東京からも仕事がかんどん入ってきた。また、進駐軍の自動車修理用部品の金型も少しずつ増え始め、バックミラーのステー、ドアハンドル、ボンネット上のマスコットの金型を手掛けた。

大学卒業後、すぐダイカスト金型専門に

大学を卒業してすぐに入社、松岡会長は、長兄に代わり父親が代社長をしていたので、実質的には経営の全権を任せられ、技術担当の副社長と共に「ダイカスト金型」専門メーカーとして舵を切った。

その時は日本がまだGHQから自動車製造の許可を得ていなかったが、トラックの製造を許すようになった。昭和25～28年の朝鮮戦争による急激な経済復活が起ると同時に昭和30年になると乗用車の生産を許可することにより、トヨタ、ニッサン、ホンダ等の日本自動車企業が本格的に動くことになった。

松岡会長は入社後の毎日の仕事が、部品の材料探しと工具調達に明け暮れたという。ベテランの職人と朝から晩まで名古屋市内の屑鉄屋へ行き、ハンドグラインダで火花を見ながらダイカスト金型に適用できる材料かどうかを点検した。エンドミルの調達が一番苦勞したという。このような材

料や工具であるため、金型寿命も1万ショットくらいしか持たない状態だった。金型の工具はゲージ、タガネ、ヤスリという手作りが続いた。

しかし、金型産業は日本の自動車の成長だけでなく、電気産業も新製品開発競争が起り、金型企業は羽振りが良くなった。納期・価格・精度等の技術的な高度化のために、NC工作機械やCAD/CAM等の設備の導入も可能になった。

企業の最大危機に見舞われる

松岡鐵工所は仕事の中心が自動車関連のダイカスト部品であったことから最大のビジネスチャンスに恵まれ成長を続けることになるが、昭和34年9月26日は同社として忘れがたい事件が起る。それは伊勢湾沿岸の愛知県・三重県の甚大な被害をもたらした「伊勢湾台風」だった。名古屋の有松駅前の工場が倒壊。さらに駅前の本社工場が商店街の中心にあり、交通の障害にもなることで中小公庫から借金して現在の工場土地1500坪を確保していた。だが2年以内に建設しないと融資を打ち切るという条件が付いていたことが、この伊勢湾台風の本社工場倒壊と重なり、土地を手放すか借入金全額返済するかという事態にも遭遇、会社倒産の危機に見舞われかてしまった。そこで当時のメインバンクであった第三銀行名古屋支店長に直々参拝九拝をして「会社の存続」を訴えた。支店長は「心配するな。中小公庫借入は全額当銀行が代払いしましょう」という答が返ってきた。死ぬか生きるかの重大局面を免れたこの件は、感謝してもしきれないわが人生の最大の幸運でもあったと、今でも松岡会長の胸を熱くする出来事だった。

二つの物件を再建できる条件を同時に手に入れることが可能になったが、松岡会長にはさらに、幸運が待っていた。それは、ダイカスト金型が日本の自動車産業には無くてはならない技術であり、ツールでもあったことである。金型の注文が順調に増加して、銀行からの借入金も支店長が「心配しないで良い」という言葉通りの成長を果たしたからである。

ところが会社は順調に成長をして行くのに、ご本人は病魔に襲われる。“好事魔多し”という例え通り、昭和42年に肺結核を患い、肺の右上葉の切



除摘出という大手術を行う。手術は大成功であったが半年間病院生活をするようになった。

病院から出ると「拾った命だった」と仕事もさらに積極的になり、名古屋の本社工場だけでなく関東の自動車メーカーに対応するため群馬県館林の工業団地に1500坪の土地に工場を建てた。さらに海外に出たユーザーと共に平成24年にタイに合弁会社を設立した。

金型工業会活動にも貢献

話は転換する。松岡会長は仕事が順調に運んでいたことから日本金型工業会での活動も積極的に手伝うことになる。

工業会に入会以来、理事を昭和40年5月～平成10年6月（33年間）、中部支部長を昭和50年5月～平成3年5月（16年間）、工業会副会長を昭和50年5月～平成5年6月（18年間）、同会長を平成5年6月～平成10年6月（5年間）を務めた。

工業会会長という要職を受けたが、その時に「構造改善事業」という提案があり、当時の黒田会長から構造改善事業検討委員会の委員長に推薦されて、経済産業省の担当官から「この事業を受けるには団体が法人格を持つことが条件になる」ということが分かり、さらに「法人設立準備委員会」の委員長も受けることになり活動が始まった。その結果、法人格を平成6年7月1日に得た。

松岡会長は長男に社長を譲り、ダイカスト金型一筋の企業を託して、後ろから社業の発展を支えたいと願う。現在はゴルフをやめているが、毎日の午前中出勤と晩酌の焼酎3杯で健康を保っている。

(I)